

# 富小路禎子百首

## 鈴木美江子 選



富小路禎子

父と娘と争へば長き夜となり明るき卓に貨幣が光る

女にて生まざること罪の如し秘かにもの種乾く季

ほのぼのと愛もつ時に驚きて別れきつ何も絆となるな

生るべき稚魚のいくつをかなしめば眼ふとつむりイクラを噛みき

衰へてやさしき父と火に寄りてはにかむ如し共にもだせば

夕の部屋に着物ぬぎおきて書き出だすこの衝迫を幾日待ちあし

斜陽族故に役にたたずといはれじと歯がみきりきり職に堪へ来し

ポケットにキリストの像常にあり所在なき時吾は撫てをり

ぬかるみに俵敷かんといふ父の声やはらかし日の射す方に

『未明のしらべ』

濯ぎあげし白き肌着を軒に掛く身に触るるものを月に潔めて

ビルの間の狭き蒼空遠くしてふり仰ぐ吾をまた孤独にす

おどろきて愛うけをりし稚き日の吾を危しと今は思はず

買ひ持てる卵は孵すすべなきに心差しくいたはりてゆく

処女にて身に深く持つ淨き卵秋の日吾の心熱くす

ぶらんこにゆれつつ吾も光りるん月は林へ入りて冷たし

ぎりぎりにみな喪ひし冬木原一途に勁き枝ばかりなり

ビルの廊をまふたおとして運ばれし山鳥一羽今日を冥くす

かんかんと音立つほどに凍る日々疎き樹林はくまなく明し

『白晝』

花のごとく開くいくひら酔の中に牡蠣死なしめて一人の夕餉

ひび荒れし掌にちようちようと鼓を打てど貧しき音は必ず出さな

白磁色の烏賊投げ出される厨茫々として死後の安らぎ

火の上にみじろぐ魚の暗々とむなしき目より白き塩垂る

未婚の吾の夫のにあらずや海に向き白き墓碑ありて薄日あたれる

夜半開く冷蔵庫の中一本のけもの白き乳凍りゐつ

秋の来ていよいよ暗き腹腔にしらすの青き目を食み落す

一心に釘打つ吾を後より見るなかれ背は暗きのつべらほう

一握りの塩放ちたる冬の水匂はぬ海へ牡蠣帰りゆく

乳房垂り暁の渚をゆくけものありのままなる姿過ぎゆく

山深くけもの死闘果てにけり澄みし流れは岩肌を落つ

眠りより覚めしはじめに一本の鍵見えて今日の生をうながす

風媒の季めぐり来し森の中待ちて遂げゆくものはやさしも

森深くふと空ありて顕つ木小屋鶏はひそかに生みてるたりき

金色の櫂そよぎて人界に言葉喪かりし夕べありにき

海山の死霊行き合ふ峠路に月が明かせる遠き氷の湖

「透明界」

造成の進みゆく街禽獸の死霊は捷く来て住まんとす

望月のひかり凝りし草の道足白々と姥は分けゆく

闇の夜の森の奥処に白炎を上ぐる辛夷があかす黄泉の道

バラ色の肉塊を切る うとましきよろこびを女は寒き夜更に

かがやきて車入り来し街空を今凶徴の鳥渡りをり

花鉢の底にとどきし根が探る無量無限の地のまぼろし

ガラス器を積みたる棚に日光射し今速なる錯乱はくる

暁の窓に立ちたる乳の瓶光源として織き光射す

母胎より彼岸に到るこの道いましばらくの緋なる夕映

葬りする露地に霧湧き前をゆく人は盗られて声なく消えぬ

網棚に緋の花束を置きしまま空車一輛夜行車は曳く

郵袋は引きずられゆき運ばるる人の言葉のいかにも重し

処女子が姥になりゆく歳月に超えし氷の川摘みし緋の花

蝕はてて童もねむりたり月光に押し流さるることきわが街

山腹を埋むる花に浮き沈み柩を昇きて村人はゆく

怨念のしたたる朱にぎくろ咲き女は一人棲む門閉す

「柩の宿」

雪止みし厨は月の光となり解脱とげたる一束の独活

抱擁をしらざる胸の深碧ただ一連に雁わたる

耳立つる白馬は天の声聴くや人の世はふと音失せて雪

毒少し秘め合ふことも生きやすく彼岸花人里近く自生す

落鮎を食めば見えくる生みて死す自然を棲ませ激つ溪水

しばしの間地上をはしる電車より見し曼珠沙華 一生のごとし

一輪の朱をのこして実となりし柘榴の間を雷照らし過ぐ

牡丹花の沈める闇にかそかなる罪過を帯びて現身ねむる

月光に紅こぼす萩の檻襖自然を曝す姥となりたし

火傷せし指にしばらく流す水月の光をかそかにさそふ

生死も離合もありて身の裡に積む塵泥に己ぬくもる

ほのほのと過ぎたる人の愛しさに似て辻の灯の昼を消のこる

剣型の葉が切り割きし闇に泛くいちはずの白 大地抒情す

黄金なす並木も走り来し人も月光の幻 一生まぼろし

一人づつ曲りゆきたる露地の闇いづれさりげなき死の淵が待つ

苦しみの噴き出づること桜咲く夜をやみがたくわれは放浪ふ

『花をうつ雷』

白芥子の茎をふるはす昼の雷 一生を賭けし鼓を置きて逝く

霜月の峠のくれなる燃えつきてこの世の外へ鴉翔ちゆく

喉ぼとけあまた漂ふ夕映の街 声涸れて人は逝きけり

明日のため燃ゆる入日に真向ひて玻璃棚に銀の牝馬棹立つ

原爆忌おだやかに過ぎ列島に鮮血のごと湧く百日紅

死期迫る老の傍にほの温き餅一片をひそと人食む

稲妻がたまゆら発く薔薇の垣・とりかぶと・人の秘す棘と毒

眼窩数多もてるおどろの実を結び月夜風の夜蓮田冷ゆる

白き萩白さるすべり月光に白狐妖猫わが庭をゆく

人の語に潰されし死か開きたる辞書の間を乾く虫骸

己が手に寸劇の幕幾度も引くごとくして一生過ぎゆく

白桃は汁淋漓たり憤りかく流し吾は老に入りゆく

銀の光放つ遺愛のペン走り夜半の白紙に湧く死者の声

面の内の闇より呼べばふりかへる吾の心よ誰にも見えぬ

抜きすてしままのあぢさる月明に藍まだ褪せぬ花首もたぐ

化野へゆく冬の坂人も吾も命素透しに見ゆる日面

『吹雪の舞』

鬼オニの裔イサなれば兄弟ケイテイ夫ウ子コなしと思おもひはじめしわが身の軽かろし

鎖くわ切り逃にれしけもの野の末すえまで真ま一いつ文字ぶんじの光ひかりが駈かくる

絶た間まなく漕こがれ続けてきしみ鳴なる日ひ常じょうといふ脆もろきふらんこ

激げき動どうの昭しょう和わを送おくる遠とほ空そらに死し霊たまを負おひて去さらぬ鳥とりたち

雪ゆき多おほき昭しょう和わ初はつ年ねんも暖ぬく冬ふゆに明あけし平へい成せいも底そこに危あや機まもつ

夢ゆめの中なかに握にぎりゐたるは昭しょう和わの掌てのひら大おほき傷きず跡あと残のこれど温ぬるし

ダリだりの遠とほ景けいの細こま密みつ写しゃ実じつの人群じんぐんの更さらに遠とほくの吾われの日ひ常じょう

ネックレスnecklessの真ま珠たま散ちりしは小こ変へん事じなれど隣りん国こくの乱らんの夜よなれば

阿あ修しゆ羅ら像ざうに蠟ろう立たてをれば己おのれが髪かみ逆さか立たつほどの歌うたは詠よみたし

『不穩の華』

黒くろき猫ねこいざなふままに従したがひきゆくに通とほ夜よの灯あかりりの行ゆき止とり道みち

不ふ和わ、不ふ安あん、不ふ倫りん息いきづく家いえ々々の間まを桜はな埋め熱ねつを病やむ街まち

黒くろ衣いの吾われは出い棺くわんを待まちち薔ばら薇ゐ園えんに黒くろ蝶てつねらふ漆し黒くろの猫ねこ

未ま熟じやくなる実みが毒どくかくすとふ芥カイ子シ畑はたけその怪けし畑はたけに花はな散ちりそめし

泥どろ眼がんは女おんな盛さかりの気き迫せまもつ 一ひと片はの憤いかりりはもちて老おいいたし

白しろ木き蓮れん、白しろ雪ゆき、白しろ飯い、白しろ絹ぬい、わが生なまのけぢめけぢめにすわる

夜よ半はん清せい冷れいの水みづ薬やくを目めにしたたらせ眠ねむれば香かほき水みづ原はらがみゆ

現いま世よに威いをもてば凝こる黒くろき影かげ日ひつ本ほん軍ぐん閥はつ、ナチスに鴉から

核かくを持つ地球ちきゅうのどこかに咲さき闌らんくる芥カイ子シ畑はたけ不ふ穩えんなれど麗うし

歌の表記・ふりがなは原則として歌集に準拠しています。

大正十五年、富小路家の一人子としてこの世に生をうけた禎子は、戦中戦後の歴史の大きなうねりの中で少女期を過ごした。なかでも戦後、華族制度が廃止されたことは、子爵であった富小路家の生活環境を一変させてしまう。戦中に母を失い、戦後の一時期、年老いた父を物心両面で支えながら、歌を詠み続けてきた。

『未明のしらべ』でのデビューは、若い一人の女性が困難な状況の中で綴った魂の記録として、また、清澄な詩的精神の

故に、多くの支持を得た。『石榴ざくろの宿』以降、独自の歌のスタイルはより鮮明になっている。最新作『不穩の華』で、第三十一回逍せう空くう賞しょうを得た。事物の表層に隠されている闇の部分掘り起こしスポットを当てて歌っていくのが、富小路短歌の特色といえる。長く親しみ、自ら舞台に立つこともある能の影響も、大きい。生きるものの永遠のテーマ「生と死」をごく初期の頃から自覚的に詠み続け、今日に至っている。

鈴木美江子（すずき・みえこ）「沃野」同人